

吉野 宮滝
一歩が踏み出された

當麻衛 葦池
この地で戦況一転する

飛鳥古京西部戦線の守り
—壬申の乱と葛城—

飛鳥 浄御原宮
天武天皇即位する



—壬申の乱とは—

西暦 672 年に起こった日本古代の内乱です。
天^{てんじ} 智^ち天皇が崩御^{ほうぎよ} (671 年 12 月) した後、大友^{おおとも} 皇子 (天智天皇の息子) が率いる「近江方」と、大海人皇子^{おおあま} (天智天皇の弟) 率いる「吉野方」が皇位をめぐる衝突し、最後は吉野方が勝利しました。大海人皇子はその後、天武天皇として即位します。

壬申の乱が起きた原因については、研究者の間でさまざまな説がありますが、当時絶大な権力を握っていた天智天皇の後、後継者であった大友皇子がそのすべてを継承できないなかで権力争いが起き、内乱までいったと理解されています。

大友皇子との権力争いがくすぶる中、大海人皇子は、病床の天智天皇に吉野へ隠居すると宣言します。しかし大海人は、国政への影響力を有したままだったと考えられています。

—「虎着翼放之」—

「虎着翼放之」(虎に翼をつけて放った) という有名な言葉が『日本書紀』に記されています。これは吉野へ向かう大海人皇子に対して、近江方が危機感を抱いて発せられた言葉とされます。

吉野へ隠居した後、大海人は、

—然今、不獲已忘承禍。何黙亡身耶。—

(『日本書紀』より)

「私の身に災いがふりかかろうとしている。 このまま黙って身を滅ぼすわけにいかない。」

大海人の影響力を排除しようとした動きが、近江方にあっただと考えられます。そのため、行動を起こしたとされます。

なお、この行動理由については、研究者の間でさまざまな説がありますが、勝者である大海人皇子による脚色 (いわゆる勝者の論理) があると考えられており、実際には近江方を倒そうとする強い意思があったと考えられています。

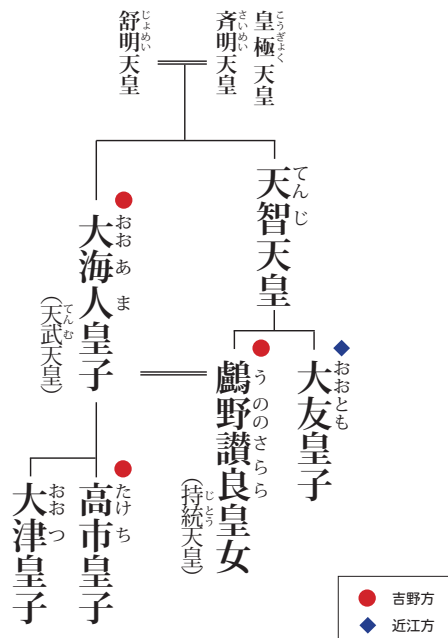
—壬申の乱勃発—

大友皇子を倒す決意をした大海人皇子は、吉野から自分の基盤である湯沐^{ゆのむら} 邑 (岐阜県安八郡) を目指します。

672 年 6 月 24 日、吉野脱出と呼ばれる最初の行動をとります。大海人は岐阜県で軍勢を整え、大和の戦況を把握したうえで、派兵することを決めました。そのなかで葛城地域も、壬申の乱における重要な舞台となっていきます。

なお、これだけスムーズに軍勢を整えられたため、吉野へ隠居した時点から大海人皇子はすでに戦争準備を始めていたという説もあります。

『壬申の乱』 関係図



I. 壬申の乱勃発

1. 天智天皇と大海人皇子 一種火、まえぶれ一

大友皇子を将来の後継者として考えていた病床の天智天皇は、大海人皇子に政権運営の補佐を命じましたが、大海人はその申し出を断り、吉野へ隠居しました。この行動から、天智天皇の措置に不満をもっていたことがわかります。

2. 吉野脱出 一大和国、激震走る一

◆672年6月24日

大海人皇子は吉野宮(吉野町宮滝)から湯沐邑(岐阜県安八郡)に向けて出発します。出発するにあたり、飛鳥古京長官であった高坂王に使いを出し、彼がもつ権限(駅鈴)剥奪を要求しますが失敗します。

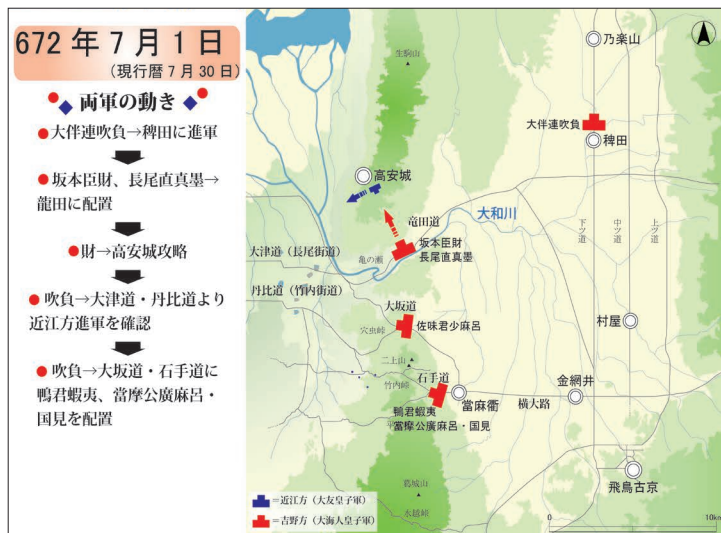
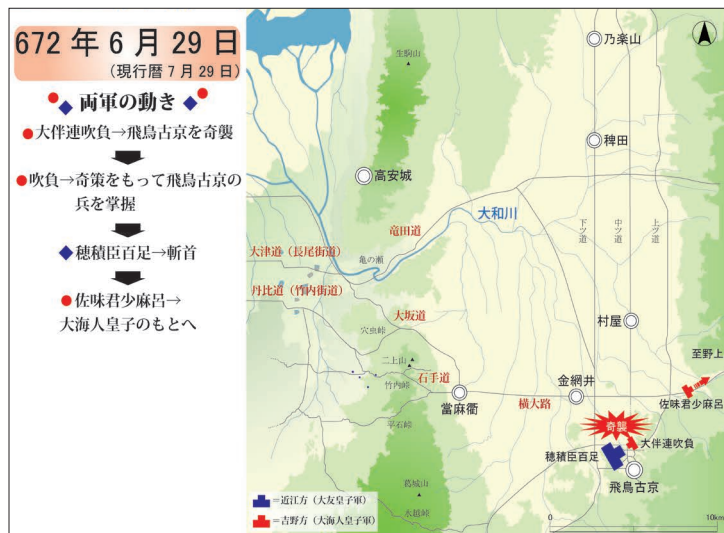
◆672年6月26日

大海人皇子が吉野を脱出したことが伝わり、近江方は飛鳥古京(明日香村)へ穂積臣百足を派遣します。また、樟使主磐手を吉備国(岡山県)に派遣し、現地を治める當摩公廣嶋を殺害するよう指示します。

大伴連吹負と兄の馬来田は、飛鳥古京にいて、大海人が湯沐邑に向かったことを聞きつけました。兄は大海人と合流することを決め、吹負は飛鳥古京にのこり、吉野方につく機会を窺うことにしました。

3. 飛鳥古京奪取 一吹負、奇策を講じる一

4. 高安城攻略 一吉野方、緒戦を制す一



◆672年6月29日 早朝

おおとものむらじふけい
大伴連吹負は、飛鳥寺(明日香村)の西に兵を集めていた穂積臣百足の隙をついて、野上(岐阜県不破郡)にいた高市皇子の名を利用し、飛鳥守備隊の掌握に成功します。

その後、百足は吹負に呼び出され斬首となりました。飛鳥古京奪取に成功した吹負は大海人に報告するため、佐味君少麻呂を使いに出します。

◆672年7月1日

大海人皇子は少麻呂から報告を受け、大伴連吹負を大和防衛軍の将軍に任命し、少麻呂を大和国へ帰らせませす。

吹負のもとに、鴨君蝦夷などの葛城地域の氏族などが集まります。吹負は、稗田(大和郡山市稗田町)まで進軍します。余勢を駆って、坂本臣財を竜田道に派遣し、高安城(奈良県生駒郡・大阪府八尾市県境)を300人程度で攻略しました。

天武天皇十二年(683)八月五日死去。

近高坂王 飛鳥古京管理者
天皇家の一族。
大海人皇子に駅鈴を求められますが、拒否しました。
天武天皇十二年(683)六月六日死去。
駅鈴官道を自由に往来できる鈴

近穂積臣百足 飛鳥留守番隊長
物部氏の支族。大友皇子に命じられて、飛鳥古京に派遣されました。飛鳥古京を守備するため、兵士の徴発の任務を担いました。留守番隊の実質的な指揮官と考えられます。

吉鴨君蝦夷 竹内峠防衛隊長
鴨氏の一族。鴨氏は、御所市鴨都波神社周辺を本拠とする、葛城地域を代表する氏族です。他の葛城地域の氏族とともに、奈良盆地西部の戦いに参加したと考えられます。

持統天皇九年(695)四月頃に死去。

吉佐味君少麻呂 穴虫峠防衛隊長
佐味とも読めます。御所市東・西佐味周辺を本拠とする氏族か。乱後は持統天皇三年(689)六月二日に撰善言司に任命され活躍しました。葛城地域の氏族として、奈良盆地西部の戦いに参加したと考えられます。

吉大伴連吹負 大和防衛軍将軍
大伴氏の一族。父に大伴連吹、兄に大伴連馬来田がいます。父は「丁未の乱」で活躍しました。兄は大海人皇子に従い、壬申の乱では近江戦線で活躍しました。大伴氏は、古くから軍勢力を背景にもつ氏族であり、活躍したと考えられます。

672 年 7 月 2 日
(現行暦 7 月 31 日)

- ◆ 両軍の動き ◆
- 坂本臣財、長尾直真墨 → 大津道・丹比道を進んできた近江方に戦いを挑む
 - 衛我河の西の戦い!!
 - 財、真墨 → 敗北
 - 財、真墨 → 懼坂道? に退却



❖ 672年7月2日

大海人は紀 臣 阿閉麻呂を大和国防衛の司令官とし、大伴連吹負の増援として置始 連 菟を含む数万の軍勢を飛鳥古京に向かわせました。

II. 街道の守り

❖ 672年7月1日 (現行暦: 7月30日)

大 伴 連 吹負は、大海人皇子の命令により大和防衛軍の本隊である紀 臣 阿閉麻呂の軍が到着するまでの間、飛鳥古京を含む大和国(奈良県)の防衛を任されることとなりました。

そのため、当初は北進して近江方の本拠地である大津 宮 (滋賀県大津市) まで進撃しようと勇んでいた吹負でしたが、河内方面から近江方の進軍を聞きつけ、これに対抗する防御線を張ることとしました。

吹負は急ぎ、奈良盆地西部のおもな交通路3つ(竜田道・大坂道・石手道)に部隊を配置します。



龍田道 (北から)

竜田道

竜田にある交通路(天武天皇11年(682)8月に関所を設置)。坂本臣財と長尾直真墨などが守備を担当。

また、正確な位置は不明ですが、紀臣大音に懼坂道を守らせました。竜田道周辺の峠道と考えられます。

— 総勢300人程度 —



穴虫峠付近 (西から)

大坂道

二上山北側の穴虫峠越えの交通路。佐味君少麻呂が守備を担当。

比較的ゆるやかで、道幅も広く、近江方の大軍が通行可能な道です。

大海人皇子の元より帰還したばかりの少麻呂が守備を担当。一触即発の両陣営の連絡場として機能したのかもしれませんが。— 総勢数百人程度 —



竹内峠越え (東から)

石手道

竹内峠越えの交通路と考えられています。鴨君蝦夷が守備を担当。

ここに、當摩公廣麻呂や當摩公国見も参加したと想定されます。

峠道は急坂でせまく、防衛は容易であつたと考えられます。

— 総勢数百人程度 —

吉 紀臣阿閉麻呂 大和防衛軍司令官
紀氏の一族。東道將軍(東海道將軍)とも言われます。一族には、蘇我馬子と物部守屋との戦い(丁未の乱、587年)の際、蘇我氏側として軍を率いた紀臣男麻呂宿禰がいます。当時の有力な氏族のひとつであり、大和戦線に参加する豪族たちを束ねる役割が与えられていたと考えられます。
天武三年(674)二月二十八日死去。
吉 置始連 菟 大和防衛軍將軍
物部氏の支族か。乱中、さまざまな戦いで活躍しています。また、中世の大和武士、布施氏は置始氏の後裔とされています。また、葛城市内にある置恩寺は置始氏の氏寺として伝えられています。

Ⅲ. 西部戦線攻防

1. 衛我河の会戦 ―西からの知らせ、変わる風向き―

◆672年7月2日(現行暦：7月31日)

早朝、占領した高安城より坂本 臣 財 は、河内平野の大津道・丹比道を利用して東進する壹伎 史 韓国の大軍勢を発見しました。財は前日の勢いをかって出撃し、石川と大和川合流地点(大阪府柏原市内)で衝突します。結果、多勢に無勢だった財は負け、懼 坂 道を守備する紀 臣 大音のもとへ敗走します。

◆**壹伎 史 韓国** 大和西部方面攻略部隊將軍

渡来系の氏族。壹伎は「伊岐」と書き、一族に、舒明天皇四年(632)十月四日、河内国(大阪府)の難波津で案内役として唐の使者を迎えた、伊岐 史乙等がいます。軍事力よりも外交力を背景に持つ氏族と考えられます。

吉 **紀臣 大音 懼坂防衛隊長**

紀氏の一族。紀臣阿閉麻呂など、紀氏は吉野方の主力を担っていたのかもしれませんが。

吉 **坂本臣 財 竜田道防衛隊長**

紀氏の支族か。『新撰姓氏録』によれば、大阪府和泉市阪本町に地盤があったとされます。

竜田道を守る他の氏族は渡来系とされることから、在地の氏族として、彼らを束ねる役割があったと考えられます。

天武天皇二年(673)五月二十九日死去。

吉 **長尾 直 真墨 竜田道防衛副隊長**

渡来系の氏族か。葛城市長尾付近を本拠としていたと考えられます。葛城地域の氏族として、奈良盆地西部の戦いに参加したと考えられます。

吉 **當摩公 廣麻呂 竹内峠防衛隊一員か**

當麻氏の一族。天武天皇四年(675)四月に天武天皇より注意(叱責内容は不明)を受けた記録が見えます。天武天皇十四年(685)五月十九日に死去。

吉 **當摩公 國見 竹内峠防衛隊一員か**

當麻氏の一族。持統天皇十一年(697)二月二十八日に東宮大傳(皇太子の教育役)に任命されました。

2. 乃楽山の敗戦 ―吉野方の劣勢、甘かった作戦―



◆672年7月3日(現行暦：8月1日)

近江方の壹伎 史 韓国の軍勢にいた来目 臣 塩籠が、吉野方に寝返っていることが発覚します。動揺している軍勢を整えるため、近江方の進軍が止まります。

同日、乃楽山(奈良市歌姫付近)に陣をしいた大伴 連 吹負に、参陣してきた荒田尾 直 赤麻呂は、飛鳥古京の守りを固くするよう進言します。それを受けて急ぎ、赤麻呂と忌部 首子人を飛鳥古京に派遣しました。彼らは道路に使う板を使い、敵に対する楯に見立て、さも大軍が防衛しているかのような風景をつくりだしました。

◆ **来目臣 塩籠 河内国(大阪府) 知事**

橿原市久米町周辺を本拠とした氏族。久米とも読めます。大伴氏と協力関係があり、軍事力を背景にもつ氏族として、戦いに参加したと考えられます。

吉 **荒田尾 直 赤麻呂 古京防衛隊長**

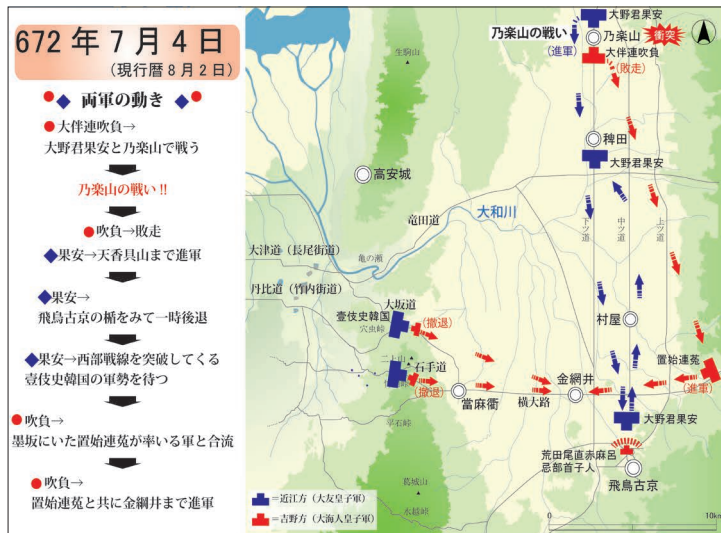
渡来系の氏族か。乱後は、天武天皇一四年(685)十月十日、病氣になった天皇のため、信濃国東間(長野県松本市の浅間温泉と伝われます)の湯治場建設に従事しました。土木技術を役立てることで、戦いに参加したと考えられます。

吉 **忌部 首子人 古京防衛副隊長**

忌部氏の一族。橿原市忌部町周辺を本拠とします。乱後は天武天皇に命じられて、日本書紀の原点となる『帝紀』と『上古の諸事』の編纂を担当しました。乱での経験が、日本書紀の内容に反映されているのかもしれませんが。

乱後も長く生存し、養老三年(719)閏七月一日死去。

3. 当麻の葦池の戦い ―吉野方の大反攻、葛城ではじまる―



❖672年7月4日(現行暦：8月2日)

いきのふひとからくに
壹伎史 韓国の軍勢が西部戦線の拠点を各個を撃破。

この近江方の攻勢を受けて、吉野方は後述する7月7日までの間にすべての部隊が東へ撤退したと考えられます。

❖672年7月7日(現行暦：8月5日頃)

おおとものむらじふけい
撤退してきた吉野方の軍勢と合流した大伴連 吹負

の軍勢は、壹伎史 韓国の軍勢と当麻の葦池のほとりで戦います。

たけきひとくめ
戦闘中、吉野方の勇者来目は、一人で韓国の軍勢に突撃し、続いて騎兵隊が突撃しました。戦いがどのように展開したのかはわかりませんが、来目の活躍により、韓国の軍勢は混乱し敗走します。

これ以後、戦況が逆転し一気に吉野方優勢となりました。

トピック「当麻氏と近江方の因縁」

乱直前に吉備守(広島県知事)であった当摩公 廣嶋が、近江方の樟使主 磐手に斬殺されました。近江方に一族を殺された当麻氏は、敵対する吉野方に属したと考えられます。

当麻の葦池の戦いの意義

大和国は、飛鳥古京に皇族が派遣されていたことや、当時の有力氏族たちの勢力基盤であったことから、重要な地域だったことがわかります。

そこを大伴連 吹負の活躍で吉野方に奪取されたことは、近江方にとって痛手だったと思われます。そこで近江方は、犬養連 五十君や壹伎史 韓国らに軍勢をたくし、大和国奪還を目指します。

当初、近江方の攻勢に対し、吹負は各地で連敗します。しかし、吉野方の置始連 菟が優秀な騎兵を引き連れ大和国の攻防に参軍したことにより情勢が変わります。同時期、韓国率いる近江方の西部方面軍は、来目臣 塩籠の裏切りにより士気が下がっていました。

いくつかの要因が重なり吉野方は、当麻の葦池の戦いで、見事に勝利をおさめます。近江方にとって大和国での戦いは、飛鳥古京の奪還を目指し北と西からの挟撃作戦で、十分に勝機のある作戦でした。

それゆえに当麻の葦池の戦いでの敗北は、近江方にとって大誤算だったことでしょう。奪還計画が破綻した近江方は、大和国より撤退します。

この戦いでの勝利は、吉野方の大和国の掌握を確実なものとする上で、大きな転機になったと評価できます。

当麻の葦池はどこか

たけきひとくめ
勇者来目の活躍により、劇的な展開をみせる当麻の葦池の戦いですが、戦闘場所はいまだにわかりません。

いくつかの説をご紹介します。

① 香芝市 良福寺の千股池周辺

・「チマタ」という地名に基づきます。

② 香芝市磯壁の吉ヶ池周辺

・谷地形から低湿地帯だと思われるのと、「アシ」が「ヨシ」に転じたと考えます。

③ 王寺町本町の芦田池周辺

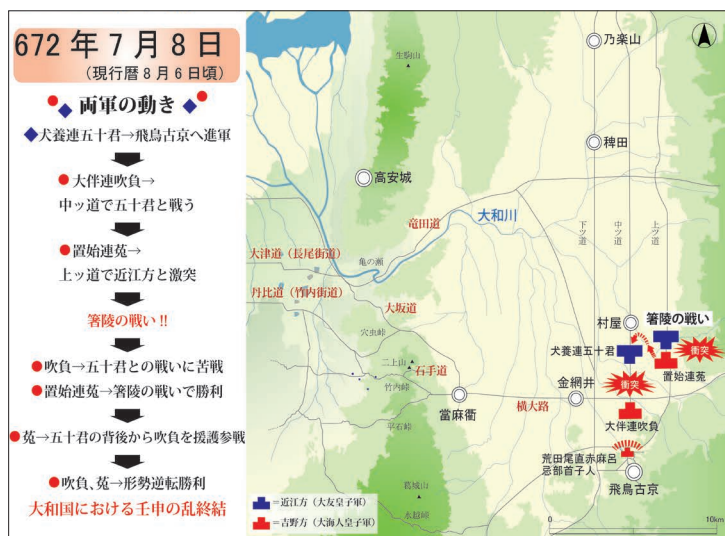
・「アシダ」という地名に基づきます。

④ 葛城市長尾の長尾神社周辺

・神社の伝承及び周辺地質上、長尾神社周辺が低湿地帯であることに基づきます。

IV. 大倭（やまと）動乱なし

箸陵の戦い —吉野方、勝利をおさめる—



❖672年7月8日（現行暦：8月6日）頃

近江方の犬養連五十君は、西部方面攻略を担当していた壹伎史韓国の軍勢が敗れ、北部および西部からの飛鳥古京の挟撃作戦を断念したと考えられます。

その後、上ツ道・中ツ道の交通路で近江方、吉野方のそれぞれの軍勢が衝突します。

吉野方の大伴連吹負と、近江方の五十君が中ツ道で戦います。当初近江方が優勢でしたが、箸陵（桜井市はしか箸墓古墳）の近く（上ツ道）で勝利した置始連苑が、近江方の五十君の背後を突くことができたため形勢が逆転し、吉野方が勝利することとなりました。

この勝利から乱終結まで、近江方が大和国へ攻めてくることはありませんでした。

大和国における壬申の乱はここに終わりを迎えました。

◆ 犬養連五十君 大和北部方面攻略部隊将軍
犬養氏の一族か。壬申の乱後半で近江方の将軍として登場しますが、これまでの職歴等は不明です。七月二十三日に栗津市（滋賀県大津市晴風付近）で捕らえられて斬首されました。犬養氏は、犬を飼い慣らす仕事をしていたと考えられます。そのため、それを軍事力活かし戦いに参加したと考えられます。

◆ 大野君果安 大和北部方面攻略部隊将軍
上毛野氏の支族。乱後は糾職大夫、いわゆる警察長官として活躍しました。上毛野氏は、白村江の戦いでも活躍した上毛野君稚子（かみつけののきみわかしこ）が知られます。そのため、軍事力を背景にもつ氏族として、戦いに参加したと考えられます。

◆ 吉野方 来目 葦池の戦い斬込隊長
来目氏の一族か。当麻の葦池の戦いで活躍しました。

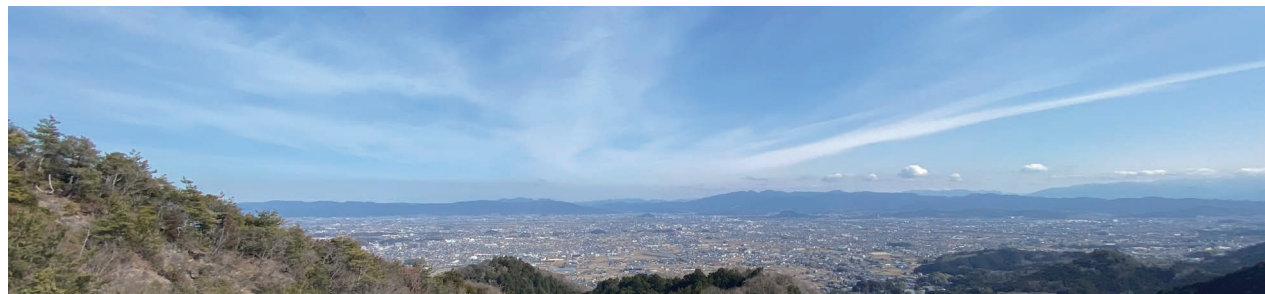
トピック

「置始氏について」

『新撰姓氏録』によると長谷置始連、大椋置始連の2つの系統があるとしています。長谷系は桜井市長谷周辺に本拠を構えたと考えられます。長谷は雄略天皇（ワカタケル大王）が宮を構えた地（泊谷朝倉宮）であり、それに伴って武器庫なども周辺に位置していたと考えられます。また、大椋系は転じて大蔵のことを指し、天皇家の蔵を警備する職掌があったと考えられます。置始氏は、古くは大王の宮、あるいは倉庫・蔵を警護する氏族だったのかもしれない。

>> 一西部戦線研究のはじまり— <<

壬申の乱は『日本書紀』に収録されていますが、江戸時代の国学者である伴信友（1773～1846）が注釈書である『長等の山風』を著したことが注目されます。奈良盆地西部の状況についても注釈をおこなっています。



壬申の乱

一三五〇年